

## 翻 訳

# ハンス・リップスの自然科学論——資料(1)

朗 哲 場 的

### 目 次

はじめに

1. 1937/38年冬学期講義「科学の研究の意味」
2. 1939年講演「科学における客観性，普遍妥当性そして無前提性」

### は じ め に

「リップスは、生物学出身のため、精神科学にはまったく関わりをもつことはなかった<sup>(4)</sup>——晩年のリップスを知るボルノーはこのように語っている。周知のように、リップスは生物学と医学の研究から哲学に移った。このことは、彼の教授資格論文が『有機体の下位構造——生物学の哲学によせて』(Die Subordination der Organe — Zur Philosophie der Biologie, 1921)であったこと、更に「変容媒質における諸植物の構造変化について」(Über Strukturänderungen von Pflanzen in geändertem Medium, 1913)によって哲学の学位を、そして「コルヒチン誘導体の効果について。コルヒチン効果の毛細管毒素の機構」(Über die Wirkung einiger Colchicinderivate. Der Kapillargiftmechanismus der Colchicinwirkung, 1920)によって医学の学位を取得していることから既に明らかである。しかも、終生、リップスは自然科学論を試みているのである。試みに挙げれば、「自然科学の形態学によせて」(Zur

Morphologie der Naturwissenschaft, 1932) 「ゲーテの色彩論」(Goethes Farbenlehre, 1939)などの講演<sup>(2)</sup>があり、その他「幾何学と経験」(Geometrie und Erfahrung, 1921) 「集合論のパラドックス」(Die Paradoxien der Mengenlehre, 1923)などの講演・論文も挙げられる。<sup>(3)</sup>

ところで、リップスの哲学については、特に解釈学的—精神科学的哲学の流れにこの哲学を位置付けようという動きが強い。ガダマーやボルノーなどがその代表である。<sup>(4)</sup>しかし、リップスはその初期以来自然科学、特に生物学の研究に関心を向けているのである。このことは、彼のいくつかの論文を挙げるまでもなく、彼の著『解釈学的論理学研究』を読めば歴然としている。<sup>(5)</sup>そこには、精神科学からというよりはむしろ自然科学からの実例がしばしば挙げられているのである。<sup>(6)</sup>このような方向、つまり、リップスの自然科学論に彼の哲学の中心を見ようとする方向でリップスを取り上げたのがラントグレーベであった。<sup>(7)</sup>彼は、「ハンス・リップスの作品における根本経験の問題」(Das Problem der ursprünglichen Erfahrung im Werke von Hans Lipps)の中で、リップスの自然科学論をリップスの「根本経験」(ursprüngliche Erfahrung)と呼び、ハイデガーの科学批判とリップスの科学論との共通点を基本的には認めつつも、リップスの独自の意味をまさにこの自然科学論に見ようとしている。すなわち、彼は次のようにリップスを位置付けているのである。

「このような[リップスの科学についての]確認は、確かに、それ自身取れば、ハイデガーの『存在と時間』の諸分析と比較して特に目新しいものはなにも生み出していない。というのは、リップスの確認はハイデガーの諸分析の影響のもと明らかにされたものであるからである。……ところが新しいのは、リップスがこの確認を基礎付ける仕方なのである。この基礎付けのために、リップスは歴史的回顧の道を取るのではなく、生物学的科学の方法問題を現象学的に解明する道(den [Weg] einer phänomenologischen Erörterung eines Methodenproblems der biologischen Wissenschaften)を取るのである。これによってリップスの諸研究はその独自の意義を獲得している。なぜなら、諸科学の『予料(Antizipation)』

を暴露するためには歴史的な道ばかりでなく、体系的な道というものが歩まれうるし、また歩まれなければならない、ということのリップスの研究が教えるからである。<sup>(8)</sup>

ここに挙げた二つの論文は、リップスの自然科学論を改めて研究するという訳者の研究展望のもとに編まれたものであり、その限りではあくまで試みの訳にすぎない。何よりも、詳細な注釈さえ付記されていないのである。この二つの論文への注釈、更にリップスの自然科学論についての詳細は訳者の今後に期待してもらいたい。(なお、次号において、リップスのゲーテ論や自然科学論についてのいくつかの論文を翻訳するつもりである。)

リップスには独自の表現が多い。したがって、正直のところ、簡単に理解しがたいところも多いのである。なによりも、多くの人の言うように彼の文体自体「難しい」のである。そればかりではない。この論文は講演のための原稿であり、したがってこの論文自体不十分な言い回しや省略が多いのである。翻訳と言っても、実は、最初から困難な試みを行なっている、と言えなくもないのである。

尚、翻訳には、Hans Lipps Gesamtausgabe IV・V(Vittorio Klostermann, 1977)を用いた。この論文については、編者による次のような注釈が施されている。

「科学の研究の意味」(Sinn des Studiums der Wissenschaft)は、「1937/38年冬学期の最初に、学長の提案に応じて、フランクフルト・アム・マイン大学で開かれた、一回限りの公開講義」であり、更に、「科学における客観性、普遍妥当性そして無前提性」(Objektivität, Allgemeingültigkeit und Voraussetzungslosigkeit in der Wissenschaft)は「夏学期のために計画されたドイツ哲学会(Deutsche Philosophische Gesellschaft)の共同研究の序論として、1939年4月13日にフランクフルト・アム・マイン大学の哲学演習において持たれた討論講演」であった。二つの論文はリップスによっては公刊されなかったと言う。

(注)

- (1) H.-P.Göbbeler und H.-U.Lessing (hrsg.), O.F.Bollnow im Gespräch, München. 1983. S.68.
- (2) Hans Lipps Werke V, Frankfurt a.M. 1977. 所収.
- (3) Hans Lipps Werke IV, Frankfurt a.M. 1977. 所収.
- (4) Hang-Georg Gadamer, Wahrheit und Methode, Tübingen 1975. Philosophische Lehrjahre, Frankfurt a.M. S.161 – 165. および Otto Friedrich Bollnow, Studien zur Hermeneutik Bd. II : Zur hermeneutischen Logik von Georg Misch und Hans Lipps, München 1983. を参照のこと。
- (5) Hans Lipps Werke II, Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik, Frankfurt a.M. 1976.
- (6) 例えば, 進行性麻痺(S. 54), 流行性感冒(S. 55), 診断(S. 55), 蝶の羽根(S. 58), イエウサギ(S. 90), チューリップ(S. 90), 顕微鏡(S. 105), 小児病(S. 107), カッコウ(S. 109), ヒヤシンス(S. 126), 結核(S. 133)などが挙げられている。
- (7) Ludwig Landgrebe, Das Problem der ursprünglichen Erfahrung im Werke von Hans Lipps (in: Philosophische Rundschau, S.166–182)
- (8) Ludwig Landgrebe, a.a. O., S. 168f.

## 1. 1937/38年冬学期講義「科学の研究の意味」

研究する場合、ともかく人は既に何かを信じているが、ここで改めて私が語ろうと思うものはこのようなものことではない。科学の意味はそれ自体疑わしくないものではない。科学は存在すべきである——今日なお存在すべきである——ということは自明なことではないのである。というのは、科学は時代と結び付いて生まれたものであるからである。いかなる時代も別の時代と闘うなかで克ち取られたものであり、その際、何が真実と見なされ、何が幻想にすぎないと見なされるべきかを決める尺度は自分であるとそれは主張する。ひとつの時代が自分の実在性を実証するのはまさしくここ、すなわち、ひとつの時代が別の時代に闘いの方向、やり方、局面を押し付け、別の時代を無理に自らの時代に引き入れ、これによって別の時代に相対的なひとつの意味を割り当てる、というところにおいてなのである。ところで、科学が本来闘った相手は今日もはや力を失っている。ところがこれとともに科学は自分の緊張をなくしてしまった。我々の情熱は別のものになってしまった

のである。今日、科学は事象性<sup>ザツハリツヒカイト</sup>や証明可能な真理に極限[尖鋭]化されてしまった。いかなる個人といえどもはや決定機関として求められることはないのである。科学は純粹な信念からなる人間の情熱をもはや受け付けない。科学はそのようなものを必要とはしないのである。新たな情熱<sup>ライデンシヤフト</sup>が科学のどこから生まれうるか、これこそ問題である。

時代と結び付いて生まれたものである限り、科学は本質的に疑わしい。科学は伝承された財産である——とされている。確かに、科学は遺産ではない。財産には遺産を特徴付けるもの、つまり、まちがいなく人はその人なりの仕方でのこの遺産に縛られるということが欠けている。遺産とは、人が自己自身に引き渡されるところのものなのである。例えば、ある民族の言語や氣風<sup>エー</sup>、およびその資産がそれである。大切なことはこれらすべてを責任を持って引き受けることである。つまり、いかなる歩みの中でも (in jedem Schritt) それに従うことである。実存は自らの際立たせ (Aus-Zeichnung) として自らを完遂するのである。

しかし、財産は財産として正当化されることが大切である。そして財産は唯一利用することによってのみ正当化されうると思われる。資格認定はただ外からのみなされうると思われる。このような正当化が見出せなければ、財産は効力を失ったものと見なされるのである。そして財産はいかがわしいもの (etwas Fragwürdiges) でもある。財産は墮落の可能性を秘めているのである。財産は不安定な関係である。すなわち、常にこの関係の主体を取り違えてしまう危険にさらされているような関係なのである。財産の所有者は常に、自分の財産の奴隷となり、自らこの関係の客体と成り下がってしまう途上にあるのである。

単なる財産としての科学——表面的に見れば科学はまさしくこのように見えるように思われる。科学は、どのようなひとにも拘わりのない無限性に没入しているように思われる。科学的方法の確實<sup>フエステイヒカイト</sup>さや正確<sup>エクザクトハイト</sup>さは、科学はただ習得すればよいと唆す。科学が様々な専門に分かれているのを今日我々が見ると、科学は勝手気ままの裁量に任されているように思われる。人は、無

責任なふまじめさを感じると信じているのである。全く無意味であるという不安は専門科学者の勤勉さによってなんとか隠されているにすぎないと思われる。科学は驚きを呼び起こすが、しかし関与 (Teilnahme) は起こさない。夢想的な専門知識が幅を利かしている。ところが、実際の科学信奉は、よく見ると、迷信であることを示しており、この迷信はひとたび科学がうまく行かないとなるや直ぐにでも敵対心に変わるほどのものなのである。このような場合、科学は机上シユールグワイツェンシャフトの科学であると誹謗される。

科学のこのような危機 (Krisis) は、しかし、能力の限界にあるのではなくて科学の意味シエンについての意識にあるのである。確かに——財産としての科学は我々の身近な科学への関わりを示していると思われる。しかし科学は実際にそうなのだろうか。事実として科学はただの措定 (Position) にすぎないのだろうか。このような措定を裏付ける論拠を提出すること——つまり、このことを、事後ナツハトヒレクツキ[補足]的な仕方ナツハトヒレクツキで裏付けるいくつかの根拠を出すこと——は、このような措定の撤去を今既に準備しながら目指す最初の裏切りの兆しということになるだろうか。科学が財産と見なされる場合、このためにはまず、どんなものでも、とりわけ自分の敵対者は割り引こうとする「中くらいの人間」によって科学は歪められているのではないだろうか。科学を単なる無拘束な財産として確保しようと望むことは——逃避を意味するのではないだろうか。このように望むことは、本質的な問いの侵入から身を守ろうとして日常的な人間が求める様々な安全エステームの体系エステームのなかに科学を組み込もうとする試みではないであろうか。財産としての科学——我々は知らず知らず、科学の背信者がひそかに我々に伝えたようなものとして科学を解してしまっているのではないだろうか。

ガリレイの言葉に、世に知に対する無知の憎悪ほど大きいものはない、という言葉がある。憎悪に変わりうるようなこの敵対の刺はどこにあるのか。ここでは憎悪は頑なになった不自由な状態を意味する。憎悪する者はただ、自分が引けを取りたくないものを本当だと思いたがらないだけである。ここで知が妬まれる理由は一体何なのか。どのような点で無知は知と和解できな

いのか。科学は保護を必要としないし求めもしない。科学は非庶民的(Uiburgerliches)なものなのである。すなわち、姿勢(Haltung)としての科学。ニーチェはかつて、科学には兵士の美德トウゲントが生きていると語っている。彼はどのように考えたのだろうか。

科学者の企てには保証がない、ということを経験ベギネンを彼はそこで見ていたのである。科学において取り組まれるものは事物ディンクである。認識するとは、仕事に従事していること(am Werke sein)を意味するのである。自分の能力によって自分の様々な仮定は実現されると確信しながら、思い切って賭しながら掴む(ein wagender Zugriff)ことによつてのみ、事物をうまくその不安定な状態からもぎ取り、これを意のままにすることができるのである。大切なことは、事物を戦術的に解決することである。科学は自ら事物に挑戦するのであり、この自ら挑戦するところに、科学が常に未知のものに立ち向かっていることを自ら知っていることが表現されている。経験科学は経験クンストの技術である。それは介入していく能力(eine eingreifende Macht)である。自然はここでは様々な制約のもとに立てられており、自然が立てられるべき局面エーベネが自然に対して押し付けられている。科学は命令フエア オルト ネント[処方]しながら現実の中に自らを貫徹するのである。我々が今生活している現実の場は何よりもまず科学によって開示され、露開され、創造されている。それも、実践の外部に保持されている科学によって、なのである。というのは、単なる実践は、[ごく当たり前の]自然的な配視にも簡単に受け入れることができるような地平ホリツオントのもとにあるからである。実践とは存在に基づいて安定化された実存の事柄である。科学は、自ら企てる際、自らについて為される応用を念頭におく必要はない。というのは、現在の視野の制限内で目的と認識されるようなものに縛られ者は、将来に向けて自らを立てるのに、つまり、まさに将来の適任者(Berufener)たらんするのに、必要とされる自由をもたないからである。純粹な、そしてこの純粹さの中で自らを鋭敏に保つ科学のみが、実践に囚われている者には既に可能性として閉ざされ続けるところのものを発見するのである。もしアルキメデスが円錐曲線の理論を展開しなかったなら、ケプラーは惑星の軌道を計

算できなかったことであろう。自分の領域の課題に対して専門家が取る単なる内的な関わりへと滑り落ちてしまうのを防ぐのは、ただ上記のような方向で覚醒し続ける (wachgehalten) 科学のみである。[専門家は、] 自分の方法にとって決定的であった決断の意味を忘れていたのである。何事も化学と解しないような者は、化学さえ正しく理解しない、と既にリヒテンベルクは語っているのである。

科学的姿勢——ここには <sup>デイスツイブリー</sup> 禁欲がある。「自由の仮面をかぶりながら禁欲は不屈この上ない」。真の大家の静けさがここに表現されている。大家は情熱は必要としない。彼の自信に満ちた自由は自分についての意見を求められようとは思わないのである。自由——これはここでは死んだ理念ではなくて、男性的な本能が他者を支配することを意味している。自由は頑強な清澄のなかで示される。兵士の勇気はそれの見本に他ならない。というのは、兵士の勇気は自分を投げる激烈な勇壮とは違うからである。鋭い洞察力が彼の勇気にはあるのである。勇敢なものたちだけが事実の男である。このことをニーチェは多分考えているのであろう。事実は敵と同じく目に留められることを望んでいるのであり、<sup>デイスダンツ</sup> 隔たりが求められているのである。<sup>ヘルズイビテイヒカイト</sup> 公正性——つまり、冷やかな雄々しさが。科学の公正性とは、ここではあたかも自分自身から人が解放されるかのような、そんな無関与な状態を意味しているのではない。自らの隔たりを優先させるという点で、つまり、思惟が脇道に逸れることに対する本能的不信という点で、科学は匿名性のもつ魅力的で緊張緩和的な性格を持っていない。人はこの公正性を確かに匿名性へと割り引くが、しかし公正性は、まさしくそれとはまったく違ったものである。それはまったく逆のものなのである。

客観性——ここにニーチェは、「礼儀の要件として最近の我々の美德の一つ」であるまじめさを見たのであるが——は、<sup>レドリップヒカイト</sup> 思惟の <sup>レヒトシヤツフエンハイト</sup> 誠実さを意味するのである。客観性は普遍妥当性とは違う。すなわち、普遍妥当性においては、妥当が[どんなものに対しても] <sup>グライヒギョルテイツヒ</sup> 無[差別] 関心の状態のまま絶対的に存在しているとされており、この妥当の絶対性は确实性の保証であるとして科学



にこっそりと引き渡されるべきであるかのようにされるが、しかし客観性とはこのようなものではないのである。客観性はそのような普遍妥当性とは逆のものなのである。客観性とは認識とその対象との相応状態を意味するのである。すなわち、対象を真剣に受け取るということ、つまり、対象を真に言い当て、それに突き当たるということの意味するのである。抵抗において、認識と呼ばれる事物への関わりが燃え立つ。それは、短絡的に自分自身の中に終始するような思惟とは違うのである。認識は常に新たな対決を必要とする。すなわち、人がそこで尽力する (sich dabei einsetzen) ということが必要とするのである。真理は、認識する人間から切り離されては存在しない。真理はけっして絶対的であろうとしないし、またありえもしないのである。事象を正当に評価できるためには、一切のものの遮断とはまったく違ったことが求められるのである。むしろ、事象に耐えることが求められるのである。事象に即した形で認識するためには、人は自ら自己自身に沈潜しなければならない。品性<sup>カクタクター</sup>が求められる。実質<sup>ケルンハフト</sup>のある二つの実在の生き生きとした出会いのなかにのみ、一つの実在が別の実在に対して開示されるということが存在するのである。意味を開掘すること (den Sinn aufschließen) が科学において求められる第一のことなのである。ゲーテはかつて次のように語っている。すなわち、規則的な自発性において人が結び付くことができないようなものを求めるようにと誘惑されるのは、常に不幸である、と。方向を欠いた、中<sup>インデ</sup>立的な真理など存在しない。不可避のものに責任をもつこと (für Unvermeidliches einstehen)こそ実在[現実]に至る唯一の通路なのである。将来として掴まれるものの明かるみのなかでのみ、実在は己れを示すのである。真理——それは、具体的<sup>メンシユリツヒカイト</sup>人間が責任をもって自らを担うひとつの実存の形式である。「具体的」人間とは、すなわち、自らのあり方と自らの時代とに結び付けられた人間である。現実[実在]は、人が我々に信じさせたがっているような単なる経験の場ではない。我々はこのような場において、征服したり、事実を取り除けたりしている略奪者ではない。むしろ、現実とは使命 (Berufung) の場である。新たな現実に向けて責めを負うということこそ認識を意見

するのである。科学において人はまさに、兵士もまた立たっているような姿にあることが求められる、とニーチェが語るとき、彼はそのようなことを考えていたのである。

では、科学の拘束性についてはどうだろうか。知として科学はそうなのではない。拘束性とは、我々の生活の中によそよそしい形に入って来ながらも尊ばれることを望むような、何らかの認識事態の權威性を意味しているのではない。科学とは、ここで我々是不變的な現実の支配に屈せざるをえないとするような何らかの匿名性の仮面ではないのである。科学の拘束性とは行為の拘束性であって、この行為の決定機関は各自が自分自身のうちに見付けるものであり、この行為の責任は各自が自ら自由な仕方であらねばならないのである。

## 2. 1939年講演「科学における 客観性、普遍妥当性そして無前提性」

客観性、普遍妥当性、無前提性を私は偶然に並べたわけではない。私がいずれを取り上げたのは、伝統的科学にたいする論争のなかでこれらが無差別に乱雑に使用されているからである。[いわく、] ここにはうぬぼれ、曖昧さが言い現わされているのであって、これにたいしては科学の正しい意味こそ思い出されてしかるべきである[といった論争である]。これら三つはすべて引用符が付される。[あるいは]ここにはイデオロギー的な、誤った意識がうまくとらえられており、この意識にたいしては科学の現実的な基盤こそもう一度取り戻されてしかるべきである。[更には]それらは誤った科学の自由の表現である[といった論争である]。しかしながら、このような論争は的を得ていない。このような論争は概念をずらすことによって支えられているのである。[すなわち]その背後には、取り合おうにも常に違った風にしか考えようとしなない攻撃者が居すわっているのである。

例えば、「無前提性」(Voraussetzunglosigkeit) とは何を意味するのであろうか。「前提」が正しく理解されたとすれば、決して無前提な科学といったよう

なことは主張されはしなかったのである。科学が許し得ないのは、唯一、科学に基づいても事柄として正当化されえない仮定 (Annahme) だけなのである。ところが、前提は仮定とは違う。というのは、仮定には物事がやすらう (auf Annahmen ruht etwas) からである。[つまり] 仮定とは、……[する] ために前以て準備せねばならぬ基盤<sup>ボ－デン</sup>のことであり、発展を前提<sup>プレミッセ</sup>にして仮定は隙間を埋めるからである。しかしながら、前提はまったく逆の時間方向を持っている。企て (Beginnen) や決断において前以て、つまり、人が自らに先立つ限りにおいて、人は前提[先行一定立]を作り出すのである。前提とは、ある物事において (bei etwas) 主導的な働きを為すものであるが、しかしその際それは常に自由に開かれており、無規定的で非表明的なものなのであって、[したがってそれは] 何らかのものか、あるいは何らかの仕方かで実現されるのである。この場合、前提の実現は、一般に私自身が私の企てを通して (durch) 獲得するところのものである。科学が一つの企てであり、歩むなかで生起するものである限り、科学は様々な前提を作り出す。この際、科学はだんだんと自分の目的を理解するようになっていくのであるから、科学の諸前提は確定的に一義化されていく。例えば、自然の法則性とは、自然の体制<sup>フエアファツスンク</sup>について予め既に人が知っていると、何か知ることができると思っているとかがいったような、そういった仮定された仮説<sup>ヒュポテーゼ</sup>のことではないのである。むしろ、それは、私が自然に向かって対処 (beikommen) しようとして取る方法<sup>ヴェーク</sup>のうちに含まれている先行一定立[前提]の方向のなかにあるのである。それゆえ、「厳密な」法則が存在しないかのように、自然「法則」とはただの規則性にすぎないとか、これらの法則のどれもただの熱力学の第二法則の性格をもつにすぎない、とかいったことに、ある日、気が付かれたとしても、それはなんともいうこともないことなのである。自然科学は、自らの方法の保証本能のゆえに、諸前提の実現を求めるが、この前提は結果を通して初めて正当化され確定されるのである。[すなわち] 事後<sup>ナツハトレークリツヒ</sup>的な反省によってそれらは分析的批判的に明らかにされるのである。このような前提が科学そのものの取り扱いにくい構成要素を成しているからといって、しかし、これによって科学の普

遍妥当性や客観性について何かが変わるわけではけっしてないのである。

ところで、無前提性が科学の許さぬ仮象である、と証明しようとする場合、このような前提、つまり、本来的な前提が考えられていなかったことは明らかである。なるほど、これによって人は横暴な放縦、[つまり]無拘束性を考える。例えば、作業に変質[墮落]してしまった科学がえてして自らの<sup>ズイン</sup>意味を忘れて迷い込む勝手な無意味な無限性を念頭にして。しかしながら、これによって科学の墮落形態が的確にとらえられるとしても、それは、この科学が、資格のない[余計な]人(Unberufenen)の手に落ちただけである。というのは、人間の関心事であるがゆえに、科学はその都度、人間の一定の自己理解(Selbstverständnis)に結び付けられているからである。人が問うことができるのは、ある一定の科学の意味とは何か、ということだけである。すなわち、科学の埋められている<sup>モティーフ</sup>諸動機を表明化することができるだけなのである。しかし、科学に[そもそも]「意味」が認められるべきかどうかについては問うことはできない——できたとしても、科学の本質に属するものとしての科学の意味は、相対的な目標に擦り替えられることになるだろう。

更に、第三の「無前提性」の意味がある。[すなわち、]「無前提的に」向かっていくことは近代の自然科学の特別な関心事なのである——そしてここにデカルトの形而上学的立場による近代科学の意味の規定が表現されている。だが、これによって考えられていることは無拘束性ではなくて普遍的拘束性への要求である。

普遍的拘束性はまず第一に普遍的妥当性とは区別されるべきである。拘束性は、人間が認識に対して取る関わり(das Verhältnis)[認識する時の姿勢]に拘わるが、しかし妥当性は、認識が個々の事例に対して取る事物的な関係(die sachliche Beziehung)に拘わるのである。例えば、物理学の知のタイプには普遍的妥当性がある。物理学においては知は在庫品のように保管され、これに包摂される様々な事例に適応されるのである。ここで大切なことは、あるものを事例として示すこと、つまり科学の<sup>ズシステム</sup>体系の中で決<sup>フエアレヒオン</sup>済することである。

だが、普遍的拘束性は科学の客観性に基づいて把握されるべきである。普遍的妥当性は、在庫品のように保管・適応されることができると限定されるのである。しかし、科学が科学として拘束的であろうとすれば、いかなる科学も客観性を要求せざるをえない。もし人が科学の理念に属するこの客観性に異論をはさむとすれば、人はこの客観性を再びこっそりと (unter der Hand) 別のものに交換してしまわざるをえない。というのは、客観的認識は恣意的認識という意味での主観的な認識に対立するからである。主観的に人が判断するのは、利害に囚われた場合、つまり、先入見が攪乱しながらそこに入ってくる場合なのである。これに対し、客観性とは事象に呼応していること (Sachgerechtigkeit), [つまり]認識が自らの対象に相応していることを意味する。真の認識は客観的である。なぜなら、この認識は自らの対象を開示し、その対象を開けたものへと向け、それが己れ自身から己れを示すように、その対象を明らかにするからである。

一体なぜ人は客観性を攻撃するのだろうか。認識者が認識に関与しないということこそ科学の「理念」である、といった意味に客観性が擦り替えられている[からである]。しかしながら、——客観的な認識が主観的に恣意的な認識に対立するからといって、主観の関与 (Beteiligung) にたいする洞察が塞がれてしまってはならない。主観の関与は真理の認識にとって障害とならないどころか、いやむしろ本質的なものである。かくして、主観の関与は客観性の条件でもある。

主観的に恣意的と我々が呼ぶのは、対象との熱心な対決なしに主張されるようなものごとである。しかしながらここには既に、認識とは思惟する人間と事物の現実との対決 (Auseinandersetzung) であるということが表現されている。私はここでは無関与ではいられない。つまり、認識において私は自らを介入させねばならないし、自ら尽力 (einsetzen) せねばならないのである。もしも認識が短絡的に自己自身のなかで終始すべきでないとするならば。抵抗において我々は認識の現実内容を経験する。対象が抵抗することによってのみ認識は支えを獲得するのである。認識しながら人はだんだんと奥深くな

<sup>ドイトウンク</sup>る解釈の中で事物に対処[を解決] (beikommen) しようとする。主観の関与、主観の介入は科学のやり方<sup>シエテール</sup>に現われている。イギリスの物理学はフランスの物理学とは違う仕方で展開されている——だからといって、獲得された結果の客観性や普遍妥当性がいささかも変わるわけではない。主観的に恣意的な認識は無拘束的なものとみなされる。客観的な、つまり、「現実的な」認識の拘束性とは次のことを言うのである。すなわち、事物と自ら対決する中で人は事物と片をつけねばならない、ということ、[つまり、]人はただ事物に近付いて行くなかでのみ、あるいは、既に開示された事物の状態そのものへと近付いて行くなかでのみ真理に到達することができる、ということを行うのである。(かくして、認識の拘束性とは、それに人が従うべきであるということの意味しはしないのである。例えば、認識の妥当性とはまさに認識の權威性を意味する、と言ったりするようなことは。)

ところで普遍的に拘束的とはどういうことであろうか。確かに科学がすべてそうだというわけではない。というのは、特別な力をもった主観の関与ということ<sup>シエテール</sup>を認識が求めるとすれば、原理的に可能なのは、ただ一人の主観にとって到達できるかぎりでの認識であるということになるからである——認識の客観性は考慮されない。というのは、私を事物に合わせることができるためには、確かにそれ相応の尺度をもまた私が持っていなければならないからである。まさに歴史は、自己自身を深め、事物と出会うための円熟を求める。ところで、例えば数学的自然科学は「普遍的に拘束的」であるということになる。数学的自然科学においては原理的には誰でもいかなる時いかなる場所でもこの認識と結び付きうるからである。というのは、この認識の主体は技術的可能性をもった人間であり、この人間の役割は誰でも引き受けることができるからである。ここで尽力されるものは、誰でも使用することができる装置や機器であり、これによって誰でも自分の負担が取り除かれ、操作が減らされるのである。